

大学周辺の野鳥

高橋 則人

元 明治国際医療大学鍼灸学教室

1. 大学構内で一年中見られる（通年）

1) スズメ：写真1

通年。実はそれほど多くない。研究棟と学習棟の間で春先に巣から落ちてくる個体をよく見かける。周囲で親がひっきりなしに鳴いていれば、親鳥が雛が巣から落下したことを認識しており、落下した雛に餌を運んだりするが、大抵は淘汰されてしまう。人が保護しても、大抵は衰弱してしまうので、厳しいようだがほっておくのが自然。観察対象としては、少し魅力は劣るが、スズメの大きさは、他の鳥との比較によく用いられるので、覚えておくとフィールドで役に立つ。鳴き声も数種類あり、どんな状況でどんな鳴き方をするのか、という観察研究もできる。

2) ホオジロ：写真2

通年見られるが、春先の雄のさえずりが有名。地方によってこのさえずりの聞きなしが違う。「源平ツツジ、白ツツジ」が最も有名（たぶん）。さえずり以外にも「チチッ」と短い声で鳴く（「地鳴き」という）。雄は名の通り頬が白い……のだが、実際は黒い。雌は全体的に地味な色合い。スズメよりやや大きい。



写真1 スズメ（大学構内）

3) セグロセキレイ・ハクセキレイ：写真3, 4

通年。スマートな体型で、長い尾が特徴。鋭く、大きな2ビートの声で鳴く。両者とも体色が白と黒



写真2 ホオジロ（大学構内）



写真3 セグロセキレイ（園部川）



写真4 ハクセキレイ（園部川）

だけで構成されていて、初心者は見分けが難しいかもしれない。決定的な差は、セグロセキレイは顔面が黒いが、ハクセキレイは白い。飛び方に特徴があり、横から見ると、飛行軌跡が波のように見える。また、飛んでいる姿よりも、歩いている姿を見かけることが多いかも知れない。スズメより大きく、ヒヨドリよりやや小さい（スマートなので小さく見える）。

4) ヒヨドリ：写真5

通年。やたらけたたましい声で鳴く。大抵の鳥は朝から昼にかけてよく鳴くが、ヒヨドリは夕方でも大きな声で鳴く。全体的にグレーな感じで、体色に特徴がないのが特徴。

フィールドでは大きさの基準となるので、そういう意味では重要な鳥。飛び方に特徴があり、先ほどのセキレイと同じように、飛行軌跡が波のようになる。また飛行中に、「ヒッヒッ」と鳴くことが多い。意外と警戒心が強い。

5) ヤマガラ・シジュウカラ・コゲラ・コガラ・ヒガラ： 写真6, 7, 8

カラ類全般。コゲラだけキツツキ類。これらは大

抵グループ行動をしているので、いちいち「あれがヤマガラでこっちがシジュウカラ」という見分けは個人的にはあまりしない。大学構内ではヤマガラが最も多い。意外と接近遭遇する機会もあり、派手な外見を観察することが出来る。次いで見かけるシジュウカラは、腹の部分に黒い線の模様があり、よく「ネクタイをしているのがシジュウカラ」というように言われる。ちなみに、コゲラはベレー帽、ヒガラはモヒカン。ヒガラは殆ど見かけないが、居ることは居る。コゲラはキツツキの仲間、文字どおり木をつつくので、その音を聞くことが出来る。カラ類が、木の枝から枝に飛ぶのに対し、コゲラは、枝と平行に移動する（木をつたう）シルエットで見分けることが出来る。日中でも見られるが、圧倒的に朝に遭遇チャンスが多い。どれもスズメと同じ大きさ。

6) カワラヒワ：写真9

通年。集団行動をとるという点では、前述のカラ類ご一行と似ているが、こちらはカワラヒワだけで集団を形成する。動いていることが多く、留まっている姿を見るのは難しいが、飛ぶ際にこの鳥の最大の特徴である羽の黄色い部分が見えるので、むしろ有難い。



写真5 ヒヨドリ（大学構内）



写真7 シジュウカラ（大学構内）



写真6 ヤマガラ（大学構内）



写真8 コゲラ（大学構内）

7) トビ：写真 10

通年。留まっている姿より飛んでいる姿が圧倒的に多い。大学近郊で空を見上げたとき、ゆったりと飛んでいる大きめの鳥は、大抵がトビ。カラスよりも大きく、飛んでいるときも、殆ど羽ばたくことをせず、歌の通り輪を描くように飛んでいる。猛禽類ではあるが、狩りをするのではなく、自然界では「掃除屋」として活躍する。日本で見られる猛禽類で唯一、尾羽が三味線のバチのような形をしている（他の猛禽は扇子型）。鳴き声は有名な「ピーヒョロロ」。

に感じる。ハシブトガラスは、ハシボソガラスよりもやや大きく、嘴が大きい。また鳴き声もハシブトガラスの方が透明感がある。鳴いている姿でも2者を見分けることが出来、一般的にハシブトガラスは上を向き（えぼる感じ）、ハシボソガラスは下を向く（悪態をつく感じ）。フィールドで大きさの基準として用いられるのでその意味では重要な鳥。

8) ハシボソガラス・ハシブトガラス：写真 11

通年。大学近郊はハシボソガラスの方が多きよう

9) その他：写真 12, 13, 14

アオジ、エナガ、キジバト、コジュケイ、キジ



写真 9 カワラヒワ（大学構内）

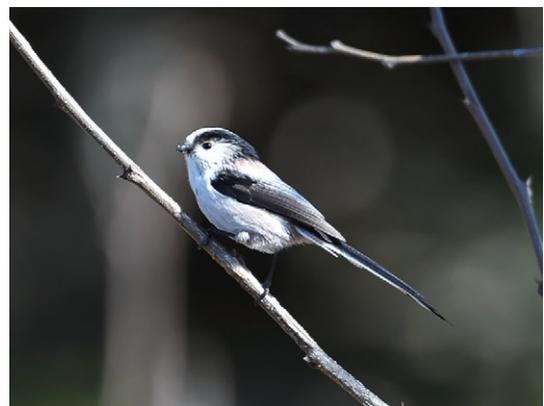


写真 12 エナガ（大学構内）



写真 10 トビ



写真 13 キジバト



写真 11 ハシボソガラス



写真 14 キジ（丹波）

2. 大学構内, 夏鳥 (春～秋)

1) アオバズク: 写真 15

フクロウ類で, 大学近郊には毎年飛来する. 近年, 学内の木に居座ったことで有名. 過去にも例がある. カラスより小さく, ドバトとほぼ同じ大きさだが, 体型のせいで, ハトより若干大きく見える. 昼間は気に入った場所から動くことは殆ど無く, そういう意味では観察しやすい. しかし警戒心は強く, かなり遠目からでも目線が合う. 夜になると街灯に集まる大型の昆虫類や, 時に小動物を捕食する. フクロウ類の観察で面白いのは, ペリット探し. これは未消化の骨や昆虫の甲殻を吐き出した物. これを見ることで, どのような食生活を送っているかが分かる. ただし, あまりお気に入りの場所を人間がウロウロすると, 居場所を変えてしまう可能性があるので注意. 「ポポッ ポポッ」という2ビートで夜によく鳴く.

2) コシアカツバメ・ツバメ: 写真 16, 17

大学構内ではこの2種が見られるが, 有名なのは研究棟と学習棟の間に営巣するコシアカツバメ. 名の通り飛行中の背中を見ると腰の部分が赤色 (朱色) をしている. コシアカツバメはツボ型の巣を作

るが, ツバメは鉢型. つまりコシアカツバメの小さい頃の姿は, 普通, 見る事が出来ない. ちなみにツバメとの見分け方は前述の腰の部分と, ツバメは腹が白く, 喉が赤い. コシアカツバメの腹は縞模様になっており, 喉までその模様がある. コシアカツバメの方が若干大きい. 達人は飛び方で見分けられることができる.

3) ヒバリ

基本的に留鳥 (1年中日本に居る) だが, 大学近郊では圧倒的に春先に見かける. 鳴きながら飛んでいる (ホバリング) 姿を見かけるのが殆どで, 留まっている姿を見るのは希.

「日一分日一分, 月二首月二首, 利盗る利盗る」という聞きなしが有名. スズメより大きく, ヒヨドリより小さい. 非常に長い時間鳴き続けるが, これには秘密があり, (たしか鳥全般がそうだったと思うのだが) ヒバリは息を吸うときと吐くとき, 両方とも声を出すことができる. つまり, 原理的には延々と鳴き続けることが出来る.

4) ウグイス・メジロ: 写真 18

これも基本的に留鳥だが, 春の「ホーホケキョ」



写真 15 アオバズク (大学構内)



写真 17 ツバメ (美山)



写真 16 コシアカツバメ (大学構内)



写真 18 メジロ (大学構内)

があまりにも有名。「鳴き声はするが、姿が見えず」の代表選手で、接近遭遇することは殆ど無い。よく「メジロ」と間違えられるが、メジロは警戒心が薄いので、よく遭遇する。体色も似ているが、目の周りが白いという、決定的な違いがある。後述するホトトギスとウグイスは、切っても切れない関係。

5) ホトトギス

ウグイスが居るところには必ずホトトギスがいる。大学近郊でも例外ではなく、夏になると、ホトトギスの声をよく聞く。ホトトギス類で有名なのがカッコウやツツドリに見られる「托卵」という行動。ホトトギスの場合には、ウグイスの巣を狙う。ウグイスが巣を作り、卵を産む頃に、ホトトギスは繁殖する。そしてウグイスの卵がある巣に、自分の卵を産む。

このホトトギスの卵は、なんとウグイスよりも先に孵化する。そして孵化したホトトギスの雛は、事もあろうに、まだ卵の状態のウグイスの卵を、巣から排除する。そして何食わぬ顔で、ウグイスの親から餌をもらって育つ。ウグイスの親は、何故かこれに気づかずに育てつづける。巣立ちの間際には、親のウグイスよりも二回りほど大きくなっているが、それでもウグイスは気づかない。カッコウの場合はオオヨシキリやアオジ、モズ、ノビタキなどが狙わ

れツツドリの場合にはセンダイムシクイが主に狙われる。ドバトとほぼ同じ大きさ。

6) その他：写真 19, 20

オオルリ、キビタキ、クロツグミ、イカル、コジュケイ、イカルチドリ

3. 大学構内、冬鳥（秋～春）

1) モズ：写真 21

秋を感じさせる代表的な鳥。ヒヨドリとほぼ同じ大きさ。モズの鳴き声は一度聞けば覚えられるほど特徴的な鳴き方だが、問題は、モズは他の鳥の鳴き方の真似をすることがある。しかもこれが結構だまされる。もう一つ有名なのは「モズの早贄」といわれるもので、越冬のため、大型の昆虫やトカゲ類を捕獲し、お気に入りの木にさして保存するという行動、と言われているが、実際の目的はよく分かっていない。フィールドでは意外と目立つところに留まっていることが多いのと、留まっている時には、尾を一定のリズムで上下させていることで容易に発見判別できる。

2) ツグミ：写真 22

本来冬鳥だが、春先に繁殖地に向かう最中の集団



写真 19 キビタキ



写真 21 モズ（大学構内）



写真 20 イカル



写真 22 ツグミ（大学構内）

に合うことがある。ヒヨドリよりもやや大きい。飛んでいる姿よりも、地面を移動している姿によく出くわす。警戒心は強いが、好奇心も強いらしく、接近遭遇してもこちらがじっとしていれば、見つめ合う事も可能。

フィールドでは、冬場ということもあり、藪の中からツグミが移動する際に枯れ葉の音がするので、容易に発見できる。ちなみに地上にすることが多いくせに、足を交互に動かすことが出来ない。セキレイ類は交互に足を動かすことが出来る。

3) ルリビタキ・ジョウビタキ：写真 23, 24

両者とも冬に比較的好く見かける。スズメより大きくヒヨドリより小さい。意外に肝がすわっており、接近遭遇しても、早々には逃げない。一度見かけた場所に頻繁に見られるので（縄張りがあるのかもしれない）、一度発見すると後が楽。雌は両者で見分けが困難だが、雄は全く違う体色をしている。ルリビタキはその名の通り瑠璃色が目立ち、ジョウビタキは腹の部分のオレンジ色が目立ち、頭の部分が灰色の帽子をかぶっているように見える。

4) その他：写真 25

シロハラ、イソヒヨドリ（但し本来は留鳥）、カケス

4. 大学近辺で見られる鳥

1) カワセミ：写真 26

通年。線路沿いの川で見かける。

2) アオサギ・コサギ・ダイサギ：写真 27, 28

通年。線路沿いの川で見かける。アオサギ、コサギ、ダイサギの順で遭遇頻度が高い。

このあたりで見られる（大きさが）最大級の野鳥。夜になると奇っ怪な声で飛んでいる鳥がいるが、それがこの3種のどれか。コサギとダイサギは夏と冬で嘴の色が変わる。

コサギは指が黄色であることに注目。これはコサギ独特の特徴（黄色い靴をはいているようなので「ミッキーマウス」と呼ばれたりする）。

ダイサギはくちばしが黄色で、これは冬に日本にいるダイサギの特徴。夏にいるダイサギはくちばしが黒となるので注意。夏のダイサギは目のまわりが青緑色になっているのも特徴。

3) カワウ・カイツブリ・カルガモ：写真 29, 30, 31

山陰線に乗っていると、日吉駅～船岡駅間にある川でその姿を見ることが出来る。通年。

カイツブリに関しては、たぶんカイツブリという



写真 23 ルリビタキ（雌もしくは若雄）（大学構内）



写真 24 ジョウビタキ（左：雄，右：雌）（大学構内）



写真 25 イソヒヨドリ (左:雄, 右:雌) (大学構内)



写真 26 カワセミ (左:雄, 右:雌) (園部川)



写真 27 アオサギ (園部川)



写真 28 ダイサギ (園部川)

シルエットだけみたが、おそらく居る。

4) ケリ

大学前の田んぼでよく見かける。

5) クサシギ

園部あたりの田んぼに春～夏にかけてよく見られる。クサシギの尾は白地なのでよく目立つが、翼は無印。

6) イソシギ

大学近郊の川に留鳥として見られる。イソシギの



写真 29 カワウ (園部川)



写真 30 カイツブリ (園部川)



写真 31 カルガモ (大学貯水池)

尾はオリーブ褐色の地で縁が白い。翼の上面は白い翼帯が目立つ。

7) ムクドリ・キジバト：写真 32

園部， 亀岡の市街地で見られる。

6. 大学近郊に飛来するカモ類 (冬限定)：写真 33, 34, 35

オナガガモ， ハシビロガモ， コガモ， マガモ

7. 大学近郊で見たことのあるレアな鳥

1) オオミズナギドリ

以前， 大学に渡りの最中の個体が墜落していた。本郷先生 (生物学) が保護したような・・・。

2) コウノトリ

亀岡駅周辺で， 営巣したつがいが， 一時ニュースになった。

3) サシバ

学生の頃に渡り途中の集団が大学の上空にいた。最近は見ない。

4) チョウゲンボウ

園部の田んぼ (線路沿い) でホバリング中の個体を見かけたことがある。最近は見ない。



写真 32 ムクドリ (大学構内)



写真 33 ハシビロガモ (大学貯水池)



写真 35 マガモ (大学貯水池)



写真 34 コガモ (園部川)



写真 36 イワツバメ (園部川)

5) ノスリ

チョウゲンボウと同じく、最近は見ない。

8. 番外編 (丹後実習に行くと見られる)

1) オオヨシキリ

そこら中にある。夏鳥。

2) イワツバメ：写真 36

宿泊施設近くの橋の下は彼らの営巣地。夏鳥。

高橋 則人先生のご紹介

生理学教室 岡田 薫

高橋先生とよく話をするようになったのは、彼が大学院生になってからでした。当時、彼は第一生理学教室の西川弘恭教授の院生として糖尿病モデルラットを使った電気生理の実験を行うため、多連ガラス電極の作成をしたいので教えて欲しいと頼まれたのが最初だったように記憶しています。ちょうど第三生理学教室の助手になって2年目だった私もガラス電極作りに試行錯誤していたこともあり、彼の凝り性な性格も相まってお互いのノウハウを教え合ううちに実験以外にもあれこれ話をするようになりました。（彼の実験室には給湯設備がなかったこともあり）実験の合間の休憩で一緒にお茶を飲んだり、他の院生たちと一緒に夕飯の鍋を囲んだりとまさに同じ釜の飯を食う研究仲間でした。彼が大学院生を修了してからは鍼灸学教室所属となり、建物も離れてしまったこともあってそう頻繁に会うこともなくなりましたが、その後も国際シンポジウムや同窓会関連の仕事で一緒になることも多く、彼の緻密で丁寧な仕事ぶりやコンピューター知識には折に触れいろいろと助けてもらいました。

高橋先生は独特の感性の持ち主でチェロを演奏したりと、多趣味かつ茶目っ気のある人でした。ちょうど10年ほど前になりますが、私がバードウォッチングに興味を持ち始めた頃に、何かのきっかけで高橋先生が鳥のことをよく知っているのので何でそんなに知っているのか尋ねたところ、彼は小学生の頃から自分のお小遣いから会費を払って野鳥の会会員だったと言うので何とも（小学生にしては）洗練趣味に驚いたものでした。筋金入りのバードウォッチャーだということがわかって以来、お勧めの双眼鏡メーカーや、単眼鏡の使い方、鳴き声の聞き分け方などバードウォッチングの師匠として野鳥観察のイロハを教えてもらいました。その時に参考になればともらった原稿が、今回掲載された「大学周辺で観察できる野鳥」でした。

この原稿は彼がまだ大学勤務だった頃、大学ホームページの彼自身のプロフィール欄からリンクさせる予定の別サイト作成のための下書き原稿でした（残念ながら、その後専門学校への移動など多忙に紛れ別サイトは完成しませんでした）。この原稿ファイルを私に渡すときに、「なんでこんな解説文を書いているかという、大学の人たちにも鳥たちのことをもっと知って欲しいんだ」と高橋先生が言っていたのをふと思い出し、大学誌に掲載することで少しでも彼の願いが叶えられれば幸いです。

この解説文が発行される頃には、今年もまた東南アジアからロシアのカツバメたちがはるばる海を越え、大学構内で例年通り巣作りに励んでいることでしょう。

窓を開けて、野鳥たちのさえずりに耳を傾けてみませんか。

空を見上げて、野鳥たちの飛ぶ姿を眺めてみませんか。

身近にたくさん野鳥たちがいることに、きっと驚くことでしょう。

遺稿を大学誌に掲載することを快くご承諾いただきました高橋先生のご遺族に、心から感謝申し上げます。また、多数の写真を提供いただきました川喜田健司教授、掲載にあたりご助言ご協力いただきました明治国際医療大学誌編集委員の皆様にも感謝するとともに、高橋則人先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

高橋 則人先生のご略歴

平成5年（1993年）3月	明治鍼灸大学（現 明治国際医療大学）鍼灸学部 卒業（大学7期）
平成7年（1995年）3月	明治鍼灸大学大学院鍼灸学研究科（修士課程） 修了（修士3期）
平成10年（1998年）3月	明治鍼灸大学大学院鍼灸学研究科（博士課程） 修了（博士2期）
平成10年（1998年）4月	明治鍼灸大学 鍼灸学部 助手
平成19年（2007年）4月	明治鍼灸大学 鍼灸学部 助教
平成21年（2009年）4月	明治国際医療大学（旧 明治鍼灸大学）鍼灸学部 講師
平成25年（2013年）4月	明治東洋医学院専門学校 教員
平成28年（2016年）4月	明治東洋医学院専門学校 附属治療所主任（鍼灸）
平成29年（2017年）4月	明治東洋医学院専門学校 附属治療所長（鍼灸）
平成31年（2019年）2月22日	逝去（享年48歳）